

曲目解説

日本人には特になじみの深いオペラ、「蝶々夫人」を作曲したプッチーニは、19世紀後半から20世紀始めにかけて活躍した「オペラ作曲家」として知られているが、実は管弦楽作品も数曲残している。「交響的前奏曲」は、1876年、彼がパチーノ音楽院（現ボッケリーニ音楽院）に在籍中、作曲コースの発表会へ出品するために書いたもので、若干18歳の作品である。今日残っているフルオーケストラの曲としては最も初期の作品である。若い頃の作品とは言っても内容は円熟しており、特にオーケストレーションには彼の才能が発揮されている。もともと、「プッチーニらしい」曲と言うよりは、むしろフランス音楽やドイツ音楽の影響が見られ、特にワーグナーの影響を色濃く受けているようである。しかし、中間部で流れる甘美な旋律は、紛れもなく「プッチーニ」であり、後年のオペラ・アリアを連想させる。

モーツァルトの交響曲第14番は、作曲者15歳の作品である。（つまり、今日の演奏会の前半は、いずれも作曲者が10代の頃の作品、後半は、作曲者が最も脂の乗った頃の作品である）モーツァルトの交響曲としては、「ジュピター」をはじめ、いわゆる三大交響曲が有名であり、30番台以前の交響曲は、25番、29番を除き、あまり演奏される機会がない。冒頭のヴァイオリンの二重奏の響きのかわいいことに、驚かれる方も多いかと思われるが、曲全体としてはよく工夫されていて、楽しい作品に仕上がっている。

「カルメン」については、もはや何も言うことが無いほど有名であり、優れた作品である。プロスペル・メリメの小説をもとにしたこのオペラは、初演後、口の悪い評論家に「もう少しで警察のご厄介になるところだ」などとさんざん叩かれたが、まもなく全世界にわたる成功を収めた。しかし、ビゼーはその完全な成功を見ることなく、初演の3ヶ月後、1875年6月3日、37歳の若さでこの世を去ったのである。

「スラヴ行進曲」には、当初「スラヴ民族の主題によるセルビア・ロシア行進曲」という標題がつけられていた。この曲の作られた1876年頃のバルカン地方は、オスマントルコ帝国に支配されていて、バルカン諸民族の独立運動が広まっていたが、ついにはセルビアとトルコの全面戦争へと発展していった。同じスラヴ民族としてセルビアに同情していたロシアは義勇軍を送り、セルビアの独立を支援した。こうした背景の中、この曲は負傷兵を救援する慈善演奏会のために作曲されたものである。曲はセルビア民謡から取材したと思われるいくつかの旋律と、あたかも勝利を宣言するかのような「ロシア国歌」から構成されている。